

男女共修世代の教員志望と家庭科観調査にみる

家政教育・家庭科教育の課題

－教職課程（家庭科）履修者対象調査の自由記述分析から－

室 雅 子

I はじめに

学校訪問や学校関係者と話をした時、聞かれることが2つある。1つめは、実際に教員になりにくい現状と資格取得が流行である最近において、本当のところ教員免許も資格取得の一つ、いわゆる「ペーパーティーチャー」志望が多いのかということ、2つめは、最近の家庭科はいろいろ変わってきているが実際のところどうなのかということである。家庭科は男女で学ぶ教科になって10年余が経過した。家庭科を教える側として生徒の持つ家庭科の男女共修意識にも変化を感じるようになってきたが、また新たに、家庭基礎の設定による単位減の問題も生じており、家庭科の意義を理解した家庭科教員の育成が望まれるようになってきている。では、実際に大学生の持つ家庭科観はどのような現状であるのか。またそのような現状に対し、大学や小中高ではどのような課題があるのか。本稿では、最近の東海3県の教員就職の状態と男女共学後の一般的な生徒の家庭科のイメージ変遷を背景に押さえつつ、本学の家庭科教職課程履修者152人を対象に行った授業内調査より、現在の教職課程履修者の現状と取得姿勢、学生の持つ高校までの家庭科のイメージについて紹介することにより、先の2つの質問に答え、さらに今後の家庭科教育および家政教育の課題を明らかにしたい。

II 教職・教職課程の現状

1. 教職就職の困難さと家庭科免許取得希望者の推移

最初に、現在の教員採用試験の合格率や教員就職率について、各所発表のデータから教員に「なりにくい」と言われている状況を把握しておくことにする。文部科学省のまとめた平成15年3月卒の国立大教員養成大学・学部就職状況によれば、9年ぶりに教員就職者が50%を超えたという。池崎他（1999）はすでに数年前から教員養成系の学生が教師にならない傾向が見られることを問題視している。現在教員就職率が高い教員養成大学・課程で7割弱、低いところで3～4割の就職状況であるが、これらには小学校教員も含まれており、教員養成大学・課程でない学部（教職課程を持つ非教員養成学部）出身者の教員志望率や教員就職率は、該当学部で取得できる免許の多くが中・高免許であることから全国的にさらに低いものであると考えられる。

東海3県の平成16年度教員採用試験発表結果（表1）によると（各県合格率は愛知県は

中高ともに全教科のみ、岐阜県は中高ともに全教科と家庭科、三重県は全教科と家庭科の中学校のみ発表されている)、各県とも中高教員合格者は約 8 倍、家庭科に至っては15～18 倍となっており、教員になりたいと強く願う学生でもかなり努力しなければ教職に就くこと、特に現役で就くことは困難である。家庭科は各校専任の教員数が他教科に比べて少ないことから、より一層である。

学生も「卒業単位より余分に科目を取って免許を取得しても教員にはなりにくい」という現状は 1、2 年生でも耳にはしており、事情により教職就職浪人ができない者、非常勤講師収入では生活できない者は、教員としての就職希望を強く抱きつつも、他方面の会社や教育関連の企業や一般企業の教育関連部署、もしくは全く別職種を受験せざるを得なくなっている。このことは、教育実習の大前提である「必ず教員になりたい者のみ実習を受け入れていただく」という条件に対し、本人の教員になりたい意欲は合致しているが、実力と社会現実から就職活動もおこなねばならない者の現実が反することとなり、4 年次によく問題になることである。

(倍)

		愛知県	岐阜県	三重県
中学校	全教科	7.5	8.1	11.8
	家庭科のみ		15.3	16.0
高等学校	全教科	8.5	8.7	11.4
	家庭科のみ		18.0	採用なし

表 1 東海 3 県の平成16年度教員採用選考試験 2 次合格倍率

* 各県教育委員会運営 Web サイト資料より筆者作成

2. 生活科学部内における教員免許取得希望者の現状

本学には教員養成課程としての学部はないが、本学部には教員になることを目指して入学する者もいる。1970年代～90年代初めにかけて、常に学部生の約50%が家庭科免許取得者であったが、近年は年によって波があるが10%～30%であり、半数程度に減少した。しかし、教員へのなりにくさを考えれば教職履修者はさらに激減していてもよさそうだが、毎年その傾向はみられない。教員という職の魅力と、本学がかつてより多くの家庭科教員を排出してきた事実によるものと思われる。現在生活科学部では学部全体の20%前後の者が教職課程の履修登録をしている。実際、登録時である 1 年次においては、資格取得志向における履修者も含まれる。しかし教職課程は卒業単位に含まれないにもかかわらず、履修すると必要単位数が非常に増え、実習も軽い気持ちでは参加できないものであることから、資格として取りたいだけの学生は 4 年間の単位取得・実習の継続の中で履修をやめていく。中には取得意思は強いが諸事情によって断念する学生もいる。

以下は 2 年前期の家庭科の指導法の授業開始時における、最近 3 年間で担当した学生の教員志望状況である。尋ねた項目は、教員になりたい度合、中高どちらの受験を希望する

か、受けたい県・市の3点である。なお、本調査では各項目と学科別の傾向も見したが、顕著な差はみられなかったため報告は割愛する。

(1) 教員になりたい度合

教職を目指す者が教職課程を履修している者であるが、個人レベルでは志望度合に温度差がある。そこで「とてもなりたい」「実習で向いていたらなりたい」「試験に受かったらなりたい」「資格として取っておきたい」「この後教職課程を継続するかも悩んでいる」「進学等のために必要である」「その他」の7つの選択肢によって回答してもらった。結果、積極的に教員に「とてもなりたい」と意志の固い者は全体の2割であるが、教壇に立って人に教える経験がないために自分に本当に向いているのかわからないために、「教員にはなりたいが実習で向き不向きを判定したい」とする3割を合わせると半数以上は教員になる意志をしっかりとっており、世間で言われるほど「ペーパーティーチャー」志向は強くないのではないかと推察される。また、「試験に受かったらなりたい」とする者も、「自分は合格者一桁数という試験には受からないかも知れないが、もしも受かったなら是非教員になりたい」という意見を述べており、本当に資格志向の者は「資格として取っておきたい」「継続悩み中」の約2割の学生に過ぎないことがわかる。

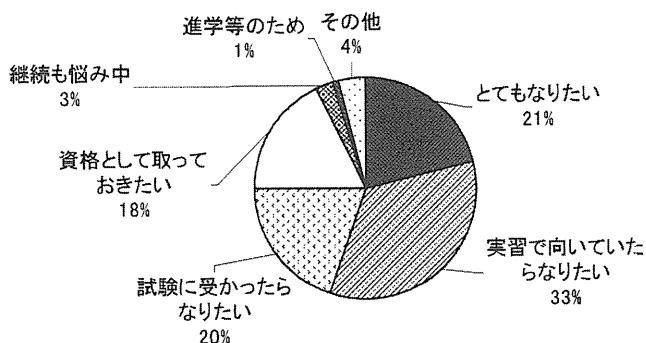


図1 教員志望度合

(2) 中学受験志望か、高校受験志望か

本学部では中学校免許と高等学校免許を同時取得もできるし、どちらかを選択して取得することもできるが、実際に採用試験を受けるときはどちらかを選択することになる。そこで、どちらかといえば中学志望か、それとも高校志望かを尋ねた。

実際には就職先の校数としては高校よりも中学校の方が多いわけだが、結果として「中学志望」は27%、「高校」は68%、「両方受けたい、または未定」が5%であり、高校希望が圧倒的に上回っていた。これは非教員養成系学科で免許を取得する学校においてよくある傾向である。しかし、この志望も厳密ではなく、学生にとっては教員になりたい思いの方が強いと推察され、受験期や非常勤講師募集期に志望とはちがう校種の求人が

あった際には、中学または高校にこだわって就職先を選別する者は少ない。

中 学	高 校	両方・未定
27%	68%	5 %

表 2 受験志望校種

(3) 受けたい県・市

受験希望地は、学生の出身と大きく関連しているため、学生の地元・出身県である場合が多い。まれに地元から離れて就職したい者や実家の移動によって他県を希望する者、とにかく教員になりたいの所以他県を複数受験する者がいる。1でも述べたように、教員採用試験では県別で合格倍率には差があるが、追跡調査をしても、募集がない県を除きほぼ地元を受験しており、合格のために倍率を気にして受験県を変更する傾向はあまりみられない。

%

名古屋市	愛知県	三重県	岐阜県	静岡県	私立校	その他
27.3	55.3	3.3	11.3	1.3	13.3	5.3

表 3 受験希望地

以上のように、非教員養成課程学部としての本学においても、教職課程履修者は資格のみ取得というよりは、本当に教員になりたい夢を持っている者が多い。これだけ希望者がいながら、家庭科の授業時間数や内容の削減により、必要とされる教員数（＝新入就職数につながる）にも影響が出てきていることは非常に残念なことである。

Ⅲ. 学生の持つ家庭科イメージと課題

それではこのような背景を持つ学生達が目指す家庭科とは、どのようなイメージの教科になってきているのであろうか。またそのイメージに見られる家庭科教育・家政教育上の課題は何であろうか。ここでは実際に聞かれた学生・生徒の発言によるイメージの変化と、調査によって明らかにされた「家庭科の教科イメージ」「印象に残った授業（範囲）」「役立ったと思った内容・あまり役立たなかったと思う内容」「家庭科観」「教員観」について紹介する。

1. 家庭科の教科イメージの変化

過去に男女共修を願い、様々な運動・活動が行われてきた家庭科も、男女共に学習するようになって10年ほど経つ。家庭科教員を目指し、家庭科の指導法を履修する学生も、共学校出身者であれば小・中・高と男女で家庭科を学習してきた世代となり、学生・生徒達の家庭科に対する意見には変化を感じられるようになった。一般の共修世代でない人に「家庭科」のイメージを尋ねると、今でも「家庭科＝女性の教科」であり、「家事・裁縫」

のイメージが強い。また、学部名として「生活科学部」や「家政学部」を名乗る場合にも同様なイメージを持たれることがあり、就職活動などの面接で高齢の男性から「花嫁修業か」、「家事なんて何を研究するのだ」などと、現在の家庭科や家政・生活科学の内容を全く誤解している発言を受けることもあるという。

しかし、共修世代の学生・生徒自身のもつイメージは変化してきているようである。先日家庭科の教科書分析をしようとしていた学生から、「授業で学んだので男女が一緒に家庭科をやっていなかったことはわかります。でもこうして教科書をみて内容の違いはわかるのですが、『男子のいなかった頃の家庭科』という空間が想像できないのです。どのように違ったのですか？」

という質問を受けた。表情を見ると本当に「想像できない」という顔をしている。彼女にとって家庭科は男女で一緒に学ばない方が教科イメージに合わないのである。

かつて、高等学校で女子生徒と話していた時、似たような感覚を覚えたことがある。今から7年前(96年)の冬である。何かの話の中で生徒が、「料理している男の子ってカッコイイよね」と言った。ごく自然な発言であった。「どういう意味で？」と聞き返したところ、某バラエティー番組名で某男性タレントが本格的に料理しているのを見ると、している姿がカッコイイからだと返ってきた。彼女たちには料理人はもとより、男性が料理をする姿は当たり前で「何が問題なの？」と言う。その2年前に男女別学最後の学年が仕切る大学祭の屋台で、厨房を全く手伝おうとしない男子大学生と話をしたときは「包丁持って紅生姜を切るなんてできないし、みっともない」と言っていたのに、常識が動いてきている、と感じられた瞬間であった。このバラエティー番組が番組内に料理コーナーを設けて放送開始したのが96年4月であり、家庭科の男女共修が始まって中学では4年目、高校では3年目に当たる。高校生の彼女たちは中2のときに共修が開始しており、中1で技術・家庭科を分野限定で男女相互入れ替え授業を経験していれば、小学校から男女で家庭科を学んできた、共修感覚の第1期生であったと考えられる。公私ともに男子と一緒に料理をしたり、家庭科を受けるのが当たり前と考える土壌があったと考えられるだろう。現実としてこのバラエティコーナーは人気があり、現在も続いている。また、このコーナーの影響もあり、現在では若い男性タレントがテレビやラジオで料理を「上手に」するコーナーが当たり前前に設けられるようになった。料理人ではない一般男性が料理をするのは特別なイベントではなくなっている。この現象は料理だけではない。衣服のリメイクや編み物をするのを誇らしげに語る男性タレントやドラマの役設定、様々な社会現象に際して「家庭科で習いましたね」とコメントする若い男性D Jもいる。企画は年長者の意図が反映されるが、コメントは本人世代の直接の言葉として受け取ってよいであろう。

ただし例外もある。男子校・男子クラスなど、学校によっては家庭科の時間が極端に少なく重要視していない学校もある。そのクラスの生徒の意見を聞くと、未だに「家庭科は女の科目」と返ってくるようである。

かつての高校生は25歳前後になった。すでに家庭科の新任教員には男女別学であったころを経験していない教員もいるようになっている。

今、家庭科は30代以上世代には旧イメージをもたれ、20代以下には男女共修の効果が現れた新しい家庭科の共修イメージが当たり前になりつつある境目にあるといえる。教員の家庭科学習経験も境目である。だが男子クラスの生徒のように一歩社会に出ればまだまだ家庭科は別学イメージである。授業を担当する家庭科教員が他教科教員からの別学イメージに盾となり、共修イメージ世代が子育て世代になるまで特に配慮すべき時であろう。

2. 学生の持つ家庭科の内容イメージ

これまで見てきたように、家庭科にも共修の影響により変化してきているが、家庭科の中身に対するイメージ自体はどうなっているだろうか。

本稿の調査対象者は本学の教職課程履修者であり、家庭科の免許を取得するという意識から一般の学生に比べ家庭科という教科に対する意識はやや高いと考えられる。ただし、履修者の中には「教員になりたいが教科はこだわっていない。生活科学部に入学したので家庭科を取得する」という者もいるので、必ずしも家庭科が好きな者、好印象の者ばかりではない。以上の前提のもとに、家庭科について実際に教材研究や授業研究を始める前の学生がどのような家庭科イメージをもっているのかについて紹介したい。

(1) 家庭科の教科イメージ

対象者に「家庭科とはどんな教科のイメージですか」と尋ねてみた。2年生の4月に調査を実施しており、まだ家庭科について教員の立場で授業を考えたことがない段階であるため、ここで尋ねた家庭科イメージは、高校までで習ってきた家庭科のイメージである。

結果、「生活や生きるために必要な知識や技術を身につける」「将来役立つ」「実用的な教科」「身近な内容」などに代表されるような「役立つ・身近」をキーワードにしたイメージが71%と大半を占めた。残りの約3割は、(5教科以外科目、入試科目でない科目なので)「力や気の抜ける授業」「おまけみたいな教科」「重要視されてなくてテスト前だけに勉強すればいい教科」であるといった、家庭科をやや軽視している表現が14%、「女の子の教科」「料理、裁縫、家事」といった古いイメージが8%であった。

大半を占めた役立ち観のあるイメージはプラスイメージであり、いままで彼女たちが受けてきた家庭科の授業は生徒によって生活にフィードバックされる内容展開であったと考えられ、家庭科教員の成果といえるだろう。一方、教科を軽視した扱いや女の子の教科といった発言は、クラスの中で回答者のみがそのイメージをもって授業に望むことは珍しい。つまり、クラスや学校全体がその雰囲気を持っていると推測される。本人の意思もあるが、卒業してきた学校のもっていた家庭科イメージや、教えてくれた教員の持っていた家庭科イメージが反映されているのではないだろうか。学校全体のイメージは入試による弊害であり、軽視は家庭科教員自身の日ごろの発言か、他の人によるジェンダーバイアスのかかった発言を日ごろから聞いていたことによるイメージ形成であろうが、マイナスイメージとしてあがってきた項目は、家庭科教員にのみ努力を委ねる問題ではなく、教育界や社会全体の家庭科および家政学のイメージを学会レベルで変える問題である。

なお、このイメージを、教員になりたい度合い別に見たところ、とても教員になりたい

者でも軽視傾向があるものも居るし、資格として取りたいだけの者でも「人間にとって大事な教科である」との発言も見られ、教科イメージと教員志望度合いには特別な傾向は見られなかった。

(2) 過去に印象に残った授業

それでは、その家庭科の中でどのような授業が印象に残っているのでしょうか。

結果として、食物・調理に関する事柄が最も多く、ついで衣服・被服内容、保育内容と続き、介護問題や商法問題など家族・消費領域に関わるものや、バリアフリーなどを扱う住居領域などは少数であった。実際の回答にあった「大学以上に中学校は聞く授業が多い中、やはり実際にやってみるという行為がとても印象に残るのだと思います」という記述に代表されるようにほとんどの印象に残っている授業は調理実習、衣服実習、保育実習など実習であった（少数派の住居も内容は設計実習であった）。家庭科教員としては、実習や演習でできるだけ印象に残り、また生活にフィードバックして自分のものとしてほしいという思いがあるが、実習を取り入れにくい領域が印象に残りにくいという問題は、教えやすい内容と教えにくい内容として教員が認識している範囲と重なっている（室・飯塚・高部1996）ことから、ただ教員が教材研究不足だと指摘するわけには行かない。教材研究も必要ではあるが、その前に大学で家庭科教員を育成するにあたり、学生の印象に残りにくかった領域もいかに大切な内容であるかの学習意義を伝えないと、授業の面白さ・楽しさ・印象深さ・教えやすさばかりを追求するあまりに内容の軽視・取捨選択が起こり、その価値観が生徒に再生産される危険をはらんでいるだろう。

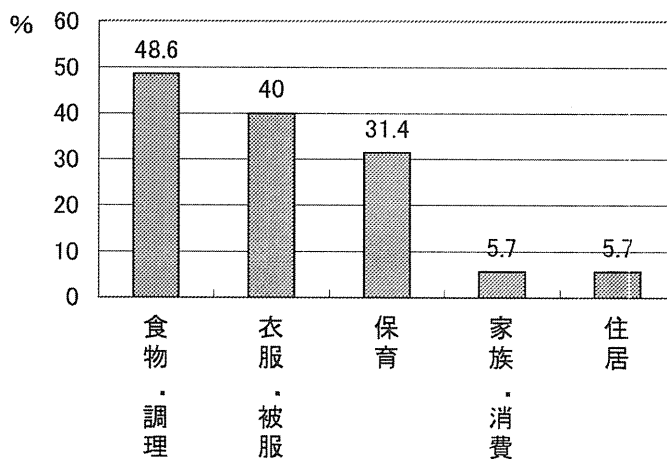


図2 印象に残った授業（複数回答）

実際に学校訪問をした時、現役の教員から「私、自分が不得意でありよく知らない内容のところは、飛ばしてやらないんですよ。自分も受けた記憶がありませんね。」と笑顔で言われたことがある。時間不足も理解しているが、これでは総合的な家庭科の意義や内容は伝えられないのではないか。そのためには大学において、教員育成課程で各領域

の専門科目担当者が、その研究分野の面白さと大切さを、とくに該当学科でない学生に大学で伝えなければ（たとえば食物学科の学生に対する家族関係学や住居学、被服学など）ならないと考えられる。

(3) 家庭科の授業で役立ったと思った内容

印象にも残っているだろうが、特に役に立ったと考えている内容は何であろうか。

結果、77%の者が「調理実習・食品」に関する項目を挙げ、ついで「被服・衣服実習関連」が29%、他の「消費、保育、介護」などを挙げた者は14%であった（複数回答）。非常に調理実習の割合が高い。この傾向は、長沢（2003）、中屋他（1999）にも高校生の役立ち観や楽しいといった記述は調理実習に関するものが多いことが報告されており、本学や教職課程者に限った傾向ではない。

ただし、そこが逆に問題である。調理実習が印象に残っているのが問題なのではなく、家庭科の免許を取得しようと考えている学生であり、しかも複数回答で各分野を記述してもかまわない状況であるのに、一般高校生と同じ傾向しか見られない、つまり家庭科の内容はもっと幅広いものであるのに、現時点で気づいていないということである。これは、指導法の授業や教育実習などにおいて、家庭科の教科意義や内容意義を家庭科教員として理解し身につけさせて、転換させる必要性を示唆しているといえる。

(4) 家庭科の授業の中であまり役立たなかったと思った内容

一方、あまり役立たなかったと思った内容は何があがってくるのであろうか。ここで挙がる事柄は、教員側の反省点につながると考えられる。

実際に集計した結果、「特になし」が大半であった。その中でもあがったものとしては、次の3点に集約される。1つめは「栄養学が専門過ぎて本質が曖昧になった」「化学式が苦手で少々躓いた」に代表される、難易度の問題。2つめは「着ない服の製作、実践の場のない裁縫」「自分が作ることのない服や家の構造の学習」「細かい計算や暗記」に代表される、学習意義の誤解。3つめに「実習以外のこと」に代表される役立ち観と家庭科の意義の問題である。

1つめとして、先に「苦手なところは飛ばす」という教員の話を紹介したが、その逆で、専門内容を高校で教えすぎる教員もいるようである。教員にとって専門教科の学問的意義が十分理解されていればいるほど、さらに専門的に教えたいと思われるが、学生の理教科目の履修状況や成績レベルに合わなければ、意義を伝える前に嫌いな苦手な内容になってしまう。2つめの問題点は、教員側から見ると必要な学習事項であるが、方法と実践が先にたち、それをやる意味が伝わっていないということである。3つめの実習の問題にもつながるが、家庭科＝技術伝達専門学校ではなく、家庭科には消費者として判断する目や社会の構造など、製品そのものを作ることを以外の目的が含まれる部分が多く存在するのに、その部分が伝わっていない。「実習以外のこと（は役立たなかった）」と記述した学生は、ほかの問いにも次のように回答している。印象に残った授業には「調理実習で失敗してまずかった」こと、どんな授業をしたいかと問えば「たくさん実習をする」、家庭科はどうあるべきかという問いには「もっと実習を増やすべきだ。口で説明するより体で覚え

ていったほうがいい」としている。家庭科は「日常生活を過ごす上で最低限必要なことを教える」イメージであるといっていることから、彼女にとって家庭科は日常生活の“技術”を学ぶ科目としてしか認識されていないのではないだろうか。教員になるのであれば実習前の知識伝達の意義も知らねばならない。大学で意識の改革を図りたいが、過去のイメージが固定されているとなかなか変わらないのも現状であり、どのように伝えればよいか難しい課題である。

(5) 家庭科という教科はどうあるべきか・どのような教員になりたいか

最後に家庭科のあり方としてどうあるべきか、どのような家庭科教員になりたいか、と教師観について尋ねてみた。この質問の回答は、学生が今まで抱いてきた家庭科イメージに照らした理想的な家庭科像が回答される場所である。

家庭科のあり方としては、今までもキーワードのように出てきた「生活にかかわる」「生活に密着している」「生きていくために必要」といった言葉が多く見られ、だからこそ「役立つように」「必要な知識・技術を身につける」「実習を多くする」「興味を持って取り組める」ようにする、と続いていた。また、「男女関係なく学ぶべき」「ジェンダー意識をなくすべき」という意見も15%ほどみられた。

どのような家庭科教員になりたいか、については、「実習をたくさんして楽しいと思われる授業」「眠っている子のいない授業」「実生活に生かせる内容」「生徒と教員のコミュニケーションが取れている授業」「全領域をやる」などがあがり、一部には過去の家庭科でそれができていなかったから自分が実践したい、または過去に心に残ったので自分もしたいと明記されていた。実際に実習の時間がとりにくくなっていることや実習に大変な準備が必要であることは後に学ぶことになるので、ここまではまだ運営面では理想論でしかない。

なお、男女を意識した発言としては、「毎回楽しみだと男の子に思われる授業がしたい」「女の子だからできないといけない、男の子だからできなくてもいいということはしたくない。」といった男子を意識した記述が見られた。他の学生は男女を意識した記述ではなかったのだが、きけば「男女ともに決まっている」そうである。

3. 家庭科の指導法学習過程での気づき 一家庭科や教員に対する考え方の変化一

ここで教職課程履修中に学生の家庭科や教員に対する考え方がどのように変わっていくかを紹介したい。科目「家庭科の指導法」の中で、家庭科とはどういう教科なのかについて、教科の変遷や教育関連の法律、学習指導要領、授業の作り方などを学ぶにつれて、学生たちは今まで受けてきた授業が実は様々な決め事や歴史の上に成り立ち、また膨大な努力と経験によって作られていたのに全く見えていなかったことに気づく。象徴的な学生の感想を1つ紹介する。「私にとって家庭科は楽な授業でした。何のために調理実習とか技術の作業をしているのか全く理解せずに授業を受けていました。今日始めて授業の意味を知りました。これでは家庭科の授業の意味がないように思います。まず（中高の）先生が最初に生徒に家庭科の授業の目的を教えるべきだと思いました。」

その後、3年の終わりまでに何度か実際に教壇に立つ模擬授業を経験し、授業はいかに準備が大変でかつ練られたものであるか、また教員の視線や一言までもが生徒が授業をうけやすいように配慮がなされているかに気づくようになる。同時に自分は未熟で思うように授業実践できないこと、指導案がうまく書けない不安を覚えるようになる。このあたりの感想文では、自分の履修前の家庭科への考え方が甘かったこと、そして難しくなるにつれて、難しいが乗り越えてやっぱり教員になりたい、という思いが強くなっていく学生が増えていくことがわかる、ただし、まだ生徒を前にした実習が想像でしかなく不安が大きい。

教育実習の前に現役の教員のお話を聞く機会があるが、ここで学生は教育実習や教員採用試験について具体的なイメージを固める。講演感想ではすでに教師の立場ならどうしなければならないか、また、家庭科が「生活に役立つ知識・技術伝達」ではなく生きていく上での意思決定ができるように学ぶ科目であることなどに気づくようになっている。家庭科のキーワードだった「身近さ」もプライバシーや価値観と背中合わせであり非常に配慮が必要なことに気づいている。教育実習後の感想では、教師という仕事や人間関係に触れた感想も多く書かれ、家庭科観の確立と教師観の再確認の上で将来を決めることになる。

4. まとめ

以上、教職課程履修者の現状と教職課程履修者のもつ家庭科観からみる家政教育と家庭科教育の課題について、それぞれの内容ごとに課題を述べてきた。本稿により大学の履修者の様子が参考になれば幸いである。家庭科を学習する意義と教員の持つ家庭科への思いは、生徒に家庭科の楽しさとなって伝わる。非常に困難な教育現場の中で学習意義の伝わる教育ができる教員を育成するためにも、今後も学生の変化を常に把握し、大学側として育成すべき役目を果たしていきたいと考えている。

参考文献

- ・池崎喜美恵他「教員養成大学家庭科生の職業選択に関する意識（第1報）－小・中・高等学校時代の家庭科に対するイメージと大学選考決定に関する意識－」日本家庭科教育学会第41巻第1号、1999、P 63－76
- ・中屋紀子他「高等学校必修家庭科履修者の感想文分析 新構想研究東北地区のデータから（第1報）－指導内容・方法とつきあわせて－」日本家庭科教育学会第44巻第1号、2001、P 41－51
- ・長沢由喜子他「高等学校必修家庭科履修者の感想文分析 新構想研究東北地区のデータから（第2報）－調理実習に関する記述と学習意欲の関連－」日本家庭科教育学会第44巻第1号、2001、P 52－63
- ・室雅子他「教育現場における家政教育の現状と課題（第1報）（第2報）」日本家政学会第51回大会発表
- ・長沢由喜子「高等学校家庭科の調理実習にみる役立ち感」日本家庭科教育学会第46巻第2号、2003、P 126－135